

【逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え】

text：渋澤 健



逆境の時こそ、力を尽くす

第6回 日本が自覚すべき「真面目」の本質

5 月22日付の日本経済新聞の一面に、気になる記事が掲載されました。「東南ア、影薄まる日本」という見出しで、ASEAN（東南アジア諸国連合）における日本の存在感を分析したものです。ASEANとの貿易額は、2008年まで米国と首位を争っていましたが、09年に中国に抜かれて、21年には3倍の差をつけられています。

ASEANの識者の意識調査で、最も経済的影響力がある国について「日本」と答えた人の割合は、たったの2.6%。「中国」の77%の足元にも及びません。

一方で、対ASEANの外国直接投資という蓄積投資（ストック）のシェアは19%とEU、米国、中国、韓国と比べてトップです。これは戦後の経済協力の功績で

す。言い換えると、ASEANとの関係で日本は「過去」の実績を現在で食いつぶしているということです。

渋沢栄一が、この現状を見たら異を唱えるでしょう。

「経済に国境なし。いずれの方面においても、わが智恵と勉強とをもって進むことを主義としなければならない」（【渋沢栄一訓言集】国家と社会）

経済成長が無い、政府はなんとかしてくれ、などと嘆く以前に、自ら国境を越えてでも世界隅々まで進むことに日本企業は努力しているのかと叱咤するでしょう。

なぜなら、栄一の時代でも同じような現状に嘆いていたのです。

「智識は減じ、気力は衰え、形式のみ

繁多になり、ついに武士の精神は廃り、商人は、卑屈になって虚偽横行の世の中になったのである」（【論語と算盤】実業と士道：かくごとき誤解あり）

平成時代の日本は、過去の昭和時代に築いた功績を食いつぶして現状を維持しました。ただ、その延長線上で令和時代の日本の繁栄を描くことができません。栄一も賛同するでしょう。

「我国の有様は、是迄やり来た仕事を大切に守って、間違いなくやつて出るといふよりも、更に大に計画もし、発展もして、盛んに世界列強と競争しなければならぬのである」（【青淵百話】元氣振興の急務）

日本人は「真面目」です。ゴールデンウィーク中は2年3カ月ぶりの海外出張

でしたが、外国と日本の飛行場の有り方を見比べただけでも、日本人の行き届いた真面目さが顕著に現れます。ただ、真面目であるということは、間違いを許さない、言われたことしかしない、などのデメリットもあります。

しかし、真面目の本質とは責任を自覚することでありませぬ。

「およそ人たるものは、この世を黄金世界となすべき責任あるものと自覚して、国家につくすべきものである」（【渋沢栄一訓言集】処事と接物）

不確実性が高まる世界情勢において、日本は「真面目」を世の中の安定剤として活用し、黄金世界を支える意気を高めるべきです。